

南太平洋に桜散る―  
幻の叔父・山岸昌司を追って

最終章

乙飛六期 故 山岸昌司 様

姪 平林 峰子

平成二十七年五月二十三日、  
この日は筑波海軍航空隊の慰霊  
祭の日です。

私は前日から、友部駅前のお  
テルに泊まり二十三日の朝妹と合  
流し永井博子さんの車に乗せて  
頂き慰霊祭会場に向かいました。

この年は戦後七十年の節目の  
ためか、地元の中学生の皆さん  
が大勢出席されており、例年と  
は異なる慰霊祭の光景でした。

彼らと同じ年頃の若者が特攻隊  
員として、ここ筑波海軍航空隊  
を飛び立ち二度とふたたび帰る  
ことがなかったのかと思うと何  
とも遣りきれない思いがしまし  
た。

一時間ほどで慰霊式典が終わり、  
記念館に戻ると野外ステージで  
戦争体験者の講和が始まってい  
ました。

高橋克己さん、柳井和臣さん、  
故横山保さんの娘の松井方子さ  
んに続いて私も叔父 山岸昌司  
とここ筑波海軍航空隊や友部駅  
前にある小伊勢屋の永井 一郎衛  
門さんとの係わりについて話を  
させて頂きました。

すると司会の金澤大介さんが  
山岸さんと同じ小隊に所属し、  
一番機に搭乗していた萩原末二  
さんが生還され、山岸昌司さん  
が戦死した昭和十七年十月二十  
六日の戦闘の様子を本に書かれ  
たんです。」と、本の「コピ―を見  
せてくれました。

私は、突然のことで何の事な  
のかよく理解できないままに講  
演会が終了し、落ち着いてから  
手渡された本の「コピ―を二字一  
字読んでみました。

するとそこには、私が一番知  
りたいと思っていた叔父の最期  
の様子が次のように書かれてい  
ました。

私は少し列機を離そうと思  
って二番機に合図をした。二番  
機は六期の乙練出身、歴戦の勇  
士だ。がっちりついていたが左  
手を挙げてやや開く。 中略)

魚雷は投下された。高度を五米  
に下げた。命中しました。』母  
艦の真上から急降下してきた二  
番機がずんずんこっちへ寄って  
くる。旋回するにもバンク 翼  
を傾けること）はとれない。足  
だけで旋回するより仕方が無い。  
傾けたら翼端が水についてしま  
う。絶対絶命であった。

その時、二番機が大きくバンク  
を取った。危ない！と見る間に  
もう火焰に包まれている。  
母艦の方へ機首を立ててみたが  
もう駄目らしい。炎とともに海  
中へ突っ込んでしまった。先に  
グラマンとの戦いで三番機を失  
い、目の前でまた二番機の最後  
を目撃して、泣くにも泣けない  
思いだった。」

（大型空母 ホーネット強襲  
の雷撃隊― 萩原末二 著）

まるで映画のワンシーンのよう  
に叔父山岸昌司が搭乗した艦上  
攻撃機が火だるまになり敵の護  
衛艦に突入していく光景が私の  
脳裏に思い描かれ、強い衝撃を  
受け、涙が止まりませんでした。

平成二十七年八月十九日 私  
は信濃大町駅五時三十二分発の  
始発列車で、茨城県友部にある  
筑波海軍航空隊記念館に向かい  
ました。そこには、事務局長の  
金澤大介さんと、故海軍大尉関  
口富美雄さんが待っていて  
くださり、車で栃木県へ向かい  
ました。

前述の手記を出され、平成十一  
年に亡くなられた萩原末二さん  
のお墓参りが目的です。萩原さ  
んは、本が大好きで自ら書店を  
経営され、その書店は今も営業  
を続けられているとの事でした  
が、今回の訪問では時間がなく  
立ち寄ることはできませんでし  
た。

お孫さんの萩原仁さんとお会  
いして、墓所に案内してもらい  
お墓参りをする事ができました。  
萩原さんは生前いつも家族の  
方々に戦争の話をしてきたそ  
うです。お花と線香を手向けし  
ばらく手を合わせてお暇させて  
いただきました。

萩原さんの手記の存在にもう  
少し早く気が付いていれば直接

お会いして叔父の最期の様子などをちょっと詳しくお聞きできたのにと本当に残念です。

帰路茨城県の護国神社に立ち寄りしました。

実は、叔父と同じ中隊に所属し、やはり叔父の最期の様子を「豫科練外史」に投稿されている萩原幾久男さん（乙飛九期生）の御遺族の連絡先が知りたくて、護国神社主催の慰霊祭に萩原幾久男さんの御遺族が出席されているのではないかと考え、宮司の佐藤さんに手紙を書き、連絡先を教えてくださいましたという経緯があり、今回そのお礼の意味もありました。

翌八月二十日は吉野さん、奈良のAさん、そして萩谷さんと同じ乙飛九期生で戦死された池田和義さんの姪の金子和美さんと合流して、前述の萩谷幾久男さんのお墓参りと御遺族の方にお会いするために茨城県下土師に向かいました。

午後一時頃ご遺族の萩谷元男さんのお宅に着き、朝からの雨も小降りになっていたので家から十分位歩いた所にある萩谷家

の墓所にお参りをさせていただきました。奥様の心のこもった手料理を頂き二時間程で萩原さんの家を後にし、その夜は土浦のホテルに泊まることとしました。翌二十一日は、陸上自衛隊土浦駐屯地構内にある雄翔館を見学させていただきました。土浦駐屯地の広いグラウンドは七十年前と変わらぬ今もそのままだと案内をしてくれた広報班の隊員の方が言っていました。このグラウンドで叔父も走ったり、教育を受けていたのかとなつかしい気持ちに浸りながら、午後一時土浦を後にして帰路につきました。

叔父の最期を知りたくて調べ始めた私の旅は人から人へと一本の赤い糸のように繋がり、今七十年の時を越え、叔父の真実を知る事ができました。

大正九年二月二十五日この世に生まれ十五歳で海軍を志願、そして昭和十七年十月二十六日午前七時〇三分南太平洋に散った山岸昌司の生きた証を知る事ができました。

今回の旅で知り合うことが出

来た多くの皆さんとの絆を今後とも大切にして、まだまだ誰にも知られずに七十年の時の流れの中に埋もれ続けている多くの豫科練戦没者のことを知って頂くために、私に出来る活動を続けていきたいと思っています。

そのためにも、遺族が相互に情報を共有しながらネットワークを構築し仲間を増やすための努力をして行きたいと考えています。

終わり